

喜界島方言の言語地理学的研究

中 本 正 智

喜界島の概観

列島全域がテレビやラジオのネットワークにすっぽりと覆われてしまい、耳にする言葉がほとんど差異のないものになってしまった。この状況は功罪の両面があると考えられるが、情報化社会にあって、やむをえないことなのかも知れない。

とはいえ、列島に残された多くの言葉は、民族的な生活の営みの結果としてあり、過去の人々の生きかたを知るための唯一の資料である。

列島のいかなる言葉もその貴重さにおいて同等であるのだが、情報語としての地位を確立した共通語は、列島各地に根を下ろし、日常語にとってかわろうとしているのに反して、伝統的な社会習慣に育まれた各地の言葉は、衰退に衰退を重ねている。

これから各地の言葉は、過去の遺物として消え去ることはやむをえないとしても、これらの中に宿された歴史性は貴重なものとして後世に伝えなければならないと考えている。喜界島の言葉を研究するのは、このような理由からである。

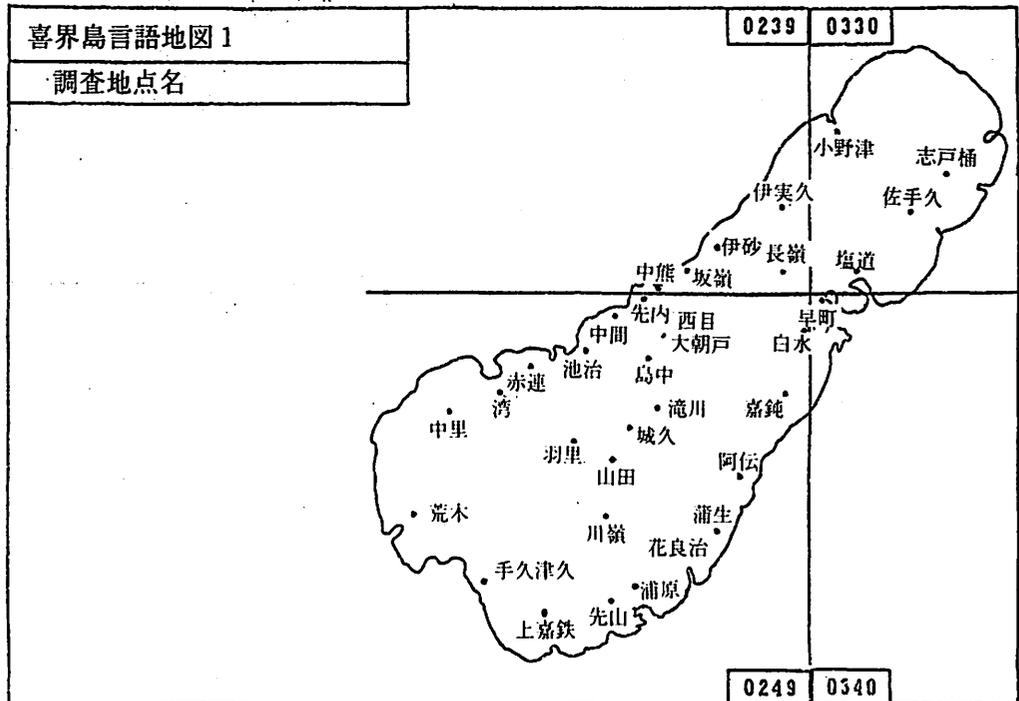
喜界島は琉球列島の北端に位置し、奄美地域の主島である奄美大島の東隣に浮かぶ小島である。奄美大島の名瀬港から喜界島の湾港まで、69kmの航程である。島の平坦地が多く、島のほぼ中央に百之台という展望のきくところはあるが、山岳地帯とか、河川とか称すべきところはない。

外部との交渉は、船舶時代には島の西端に位置する湾港が中心であった。湾と赤連は、島の文化的な中心部をなしている。航空機時代に入って島の西端に喜界島空港ができて、より便利になった。

往時は、沖縄の久高島の漁師が喜界島の近海まで来て操業していたため、島の北東部にある早町や塩道が漁港として繁栄したこともあった。塩道や早町は現在でも漁港として発展している。島内の交通は、一周バスとタクシーがあり、便利である。

喜界島は、奄美では、小島に属しながらも平坦地が多いために耕地面積はむしろ広い。島人は農業を主とし、とくにさとうきび栽培に力を入れている。

喜界島は琉球王国時代から大和旅の要地であった。琉球王国時代に沖縄の首里軍が攻めてきて、そのまま同島の西端の荒木集落に定住したとも伝えられている。このよ



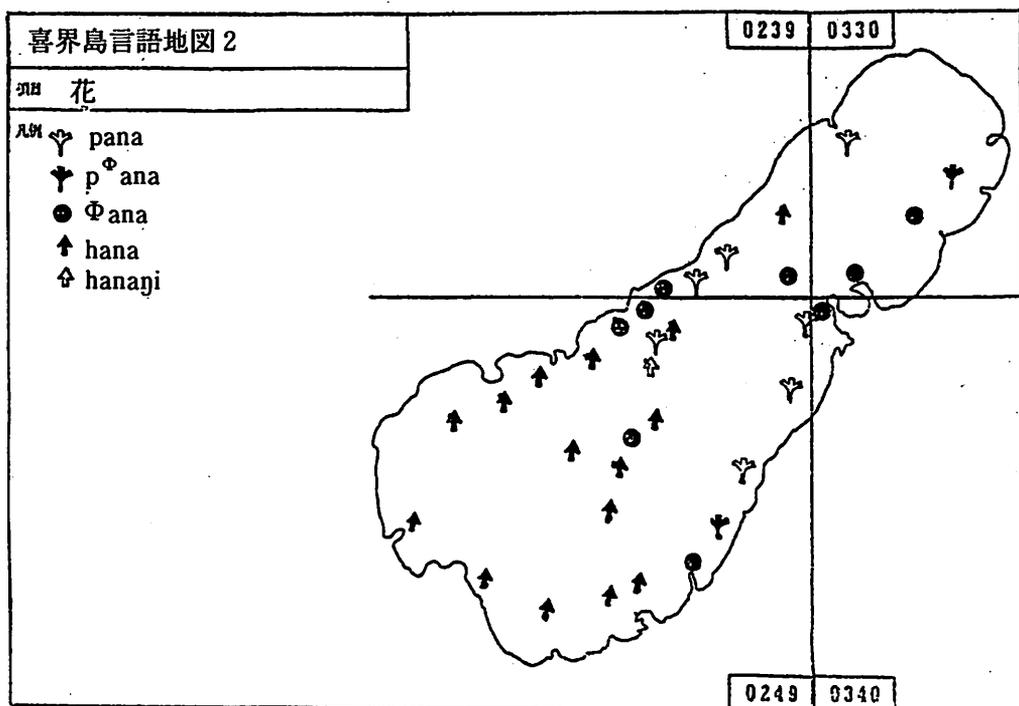
うな情況のもとで、喜界島は奄美の一島でありながら、文化的に沖縄の影響を強く受けている。

たとえば、奄美大島の特徴としての中舌母音が極度に衰退している。これは中舌母音を持たない地域である沖縄との交流が一つの原因となっているように察せられる。

喜界島は、琉球列島の中でも文化の通過地点としての性格をもち、その言葉は、奄美、沖縄、鹿児島の影響を強く受けているとみられるのである。

調査と方法

喜界島への現地調査は、昭和61年7月に約1週間、実施することができた。調査にあたっては、筆者のほかに、東京都立大学国語学研究室の、木川行央助手、篠崎晃一院生、石井直子、岩井文男、内海美幸の学生諸君が参加した。均質の調査資料を得るには、均質の音声表記がなされなければならない。そのために、研究室で喜界島方言の音声テープによる聴きとりをしたほかに、現地で調査に入る前に一人の話者の発音を全調査員で聴きとり、表記の統一をはかったのであった。これで充分とは言えないが、筆者の数回にわたる喜界島調査の経験を土台にすれば、資料として充分耐えうる調査が実施できるのではないかと期待したのであった。実際の調査にあたっては、一



調査員が一ヶ所に集中しないで各地に分散するように配慮した。

調査地点は、喜界島の34全集落である。行政上の事情から、上嘉鉄のように最近になって大集落が2ないし3の集落に分割されているところもあるが、昔から同一集落としてまとまっているので、調査ではこれらを分割せずに、一集落のままあつかうことにした。したがって、喜界島の全調査地点は34地点ということになる。

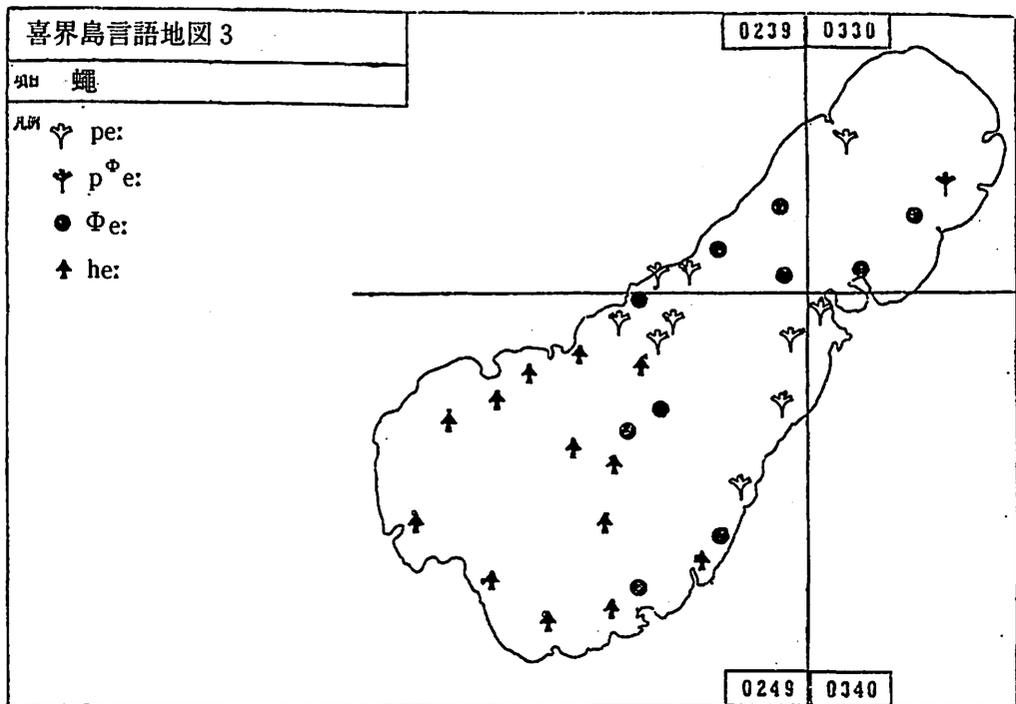
調査項目は、筆者の調査した重点地点地区の調査の中から、喜界島内で地域差をこわす重要項目を200余りにしぼって選定した。

調査結果は、調査員がそれぞれ整理し、現在、言語地図を作成している。近い将来、一冊の言語地図にまとめて刊行し、後世に残すつもりである。

本稿は、作成中の言語図の中から八行P音について、その成果の一端を報告するものである。

八行P音の分布

琉球列島における八行P音については、琉球語研究者のほとんどが触れている。しかしその実態の全容は永い間、明らかにされないままであった。八行P音の実態研究をみると、次のように段階的に明らかにされてきた。



に P 音が現れている、(2)では花良治がΦ音となり、塩道に P 音が現れている、(3)では小野津、志戸桶、塩道に P 音が現れている、という結果になっている。

これから、喜界島のハ行 P 音は北部寄りに現れることが明らかとなっていた。にもかかわらず、この地域の明確な P 音分布の姿を示すまでには到らなかった。

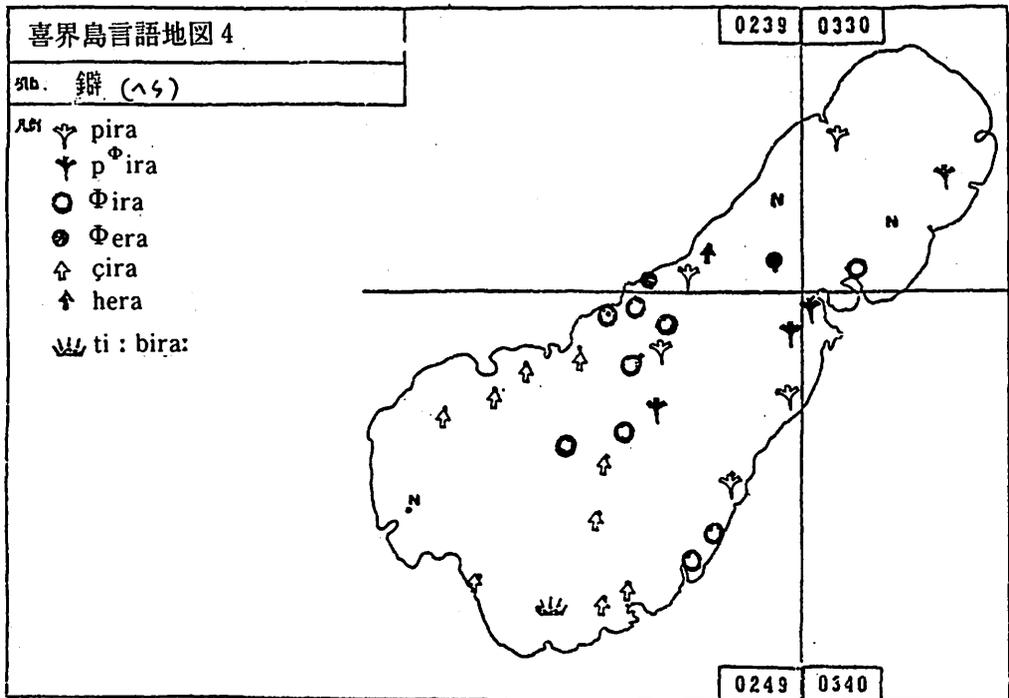
ここでは、今回調査した項目の中から、ハ行音を語頭にもつ語を選び、その分布をえがいて考察することにする。

花の方言分布

奈良時代から花を表す語はハナであり、祖形として *pana を推定することができる。音韻は音的環境によって変化するものであり、それはハ行音においても例外ではない。ハ行子音がどのような音的環境で変化しているか、そしてハ行 P 音は環境によって変化速度に差があるか、これらを中心に考察することにする。

広母音 a の前のハ行子音の姿をみるために「花」を表す語をとりあげることにする。諸方言が次のように分類される。

pana 阿伝、嘉鈍、白水、小野津、伊砂、坂嶺、大朝戸
 p^Φana 蒲生、志戸桶



Φana 花良治、早町、塩道、佐手久、長嶺、中熊、城久、先内、中間

(1) 奄美地域について、服部四郎博士、上村幸雄氏、徳川宗賢氏の「奄美諸島の諸方言」「奄美諸島諸方言の言語年代的調査」(「奄美」九学会連合、1959年)によって、その分布の概略が明らかにされた。

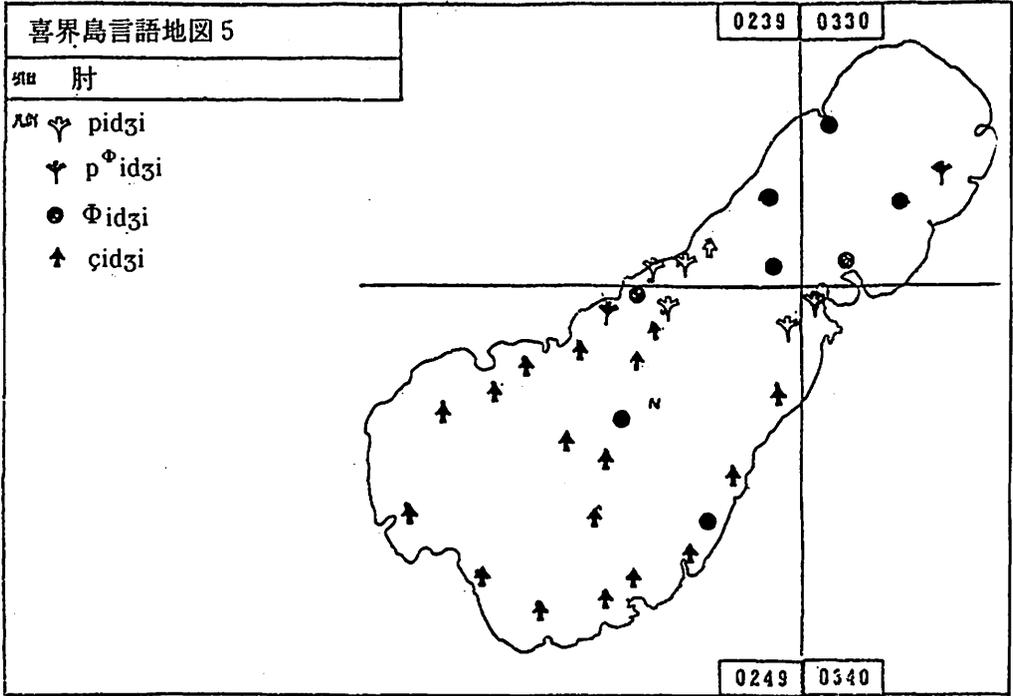
(2) その後、平山輝男博士、中本正智の「琉球与那国方言の研究」(東京堂、1964年)、大島一郎氏を加わえた「琉球方言の総合的研究」(明治書院・1966年)、『琉球先島方言の総合的研究』(明治書院・1967年)において、琉球列島のハ行P音の全容が見えてきたのであった。

(3) 拙論「古代ハ行P音残存の要因—琉球に分布するP音について—」(『国語学』107・1976年)は、自ら調査した資料に基づいた琉球列島全域のハ行音の構造的な分析とその分布を通して、P音残存の要因を追究したのであった。

これで、琉球列島におけるハ行音の実態的な姿は、ほぼ明らかにすることができたけれども、集落ごとに異なる琉球列島の方言分布を考えると、しらみつぶし調査を実施しない限り、細かなところは自信がもてなかった。

そこで、今回の喜界島の全集落を実施し終えたところで、ハ行子音の分布の姿を考察することにした。

ハ行P音のある地域を喜界島の集落に限ってみると、(1)では阿伝、花良治、小野津



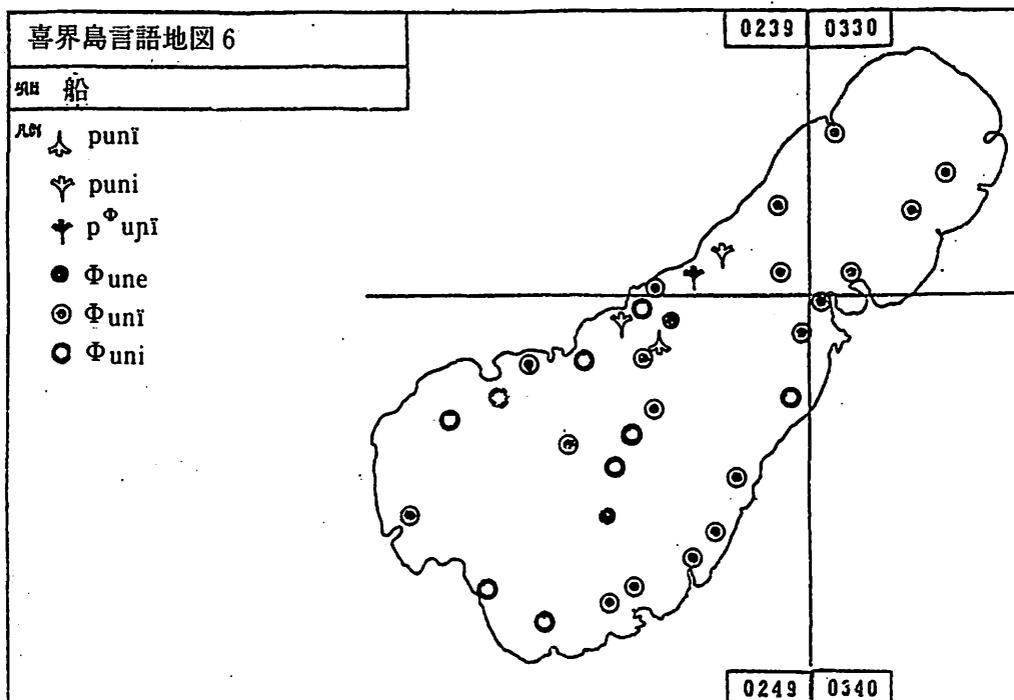
- hana 荒木、手久津久、上嘉鉄、先山、浦原、川嶺、伊実久、西目、滝川、山田、羽里、池治、赤連、湾、中里
- hanaji 島中

喜界島のハ行P音をもつ方言では、Pの破裂性が各方言で弱化しているのが特徴であり、方言によっては、P^φで表記するのが適当と思われる。ちょうどPの変化の時期にさしかかっているから、Pからφまでの音声が微妙に連続しているとみることもできる。ひとまず、P音をもつ地域と、そうでない地域を区切って分布図をえがくことにしたい。

P音をもつ地域は、従来知られていたように、北部であることにかわりないのだが、分布図をえがいた結果、むしろ喜界島中部まで広がっているとみたほうがよい。つまり、東海岸の浦生から北の地域に、西海岸の大朝戸、坂嶺から北の地域に分布していることが明らかとなった。

φ音はP音の近隣に分布し、h音は荒木、湾など南部一帯にまとまって分布している。

これらの分布から喜界島におけるハ行子音の変化の歴史を推測することが可能である。つまり、喜界島のハ行子音は、かつて全域でP音であったのだが、文化の入口で



ある湾からh音がはじまり、周辺に及んでいった。そして島の中北部では今なおP音をとどめているが、これもΦ音へ変化をはじめているとみることができる。

こうして、喜界島におけるP→Φ→hの変化は南部から起こり、次第に北の地域に広がり、いずれは全島に及ぶであろうことが知られる。南の小さな島の内部で起こっている音韻変化が、実は列島中央語において奈良時代から江戸時代にかけて実現された音韻変化であるということを思うとき、言語変化の不思議さを感じずにはいられない。

蠅の方言分布

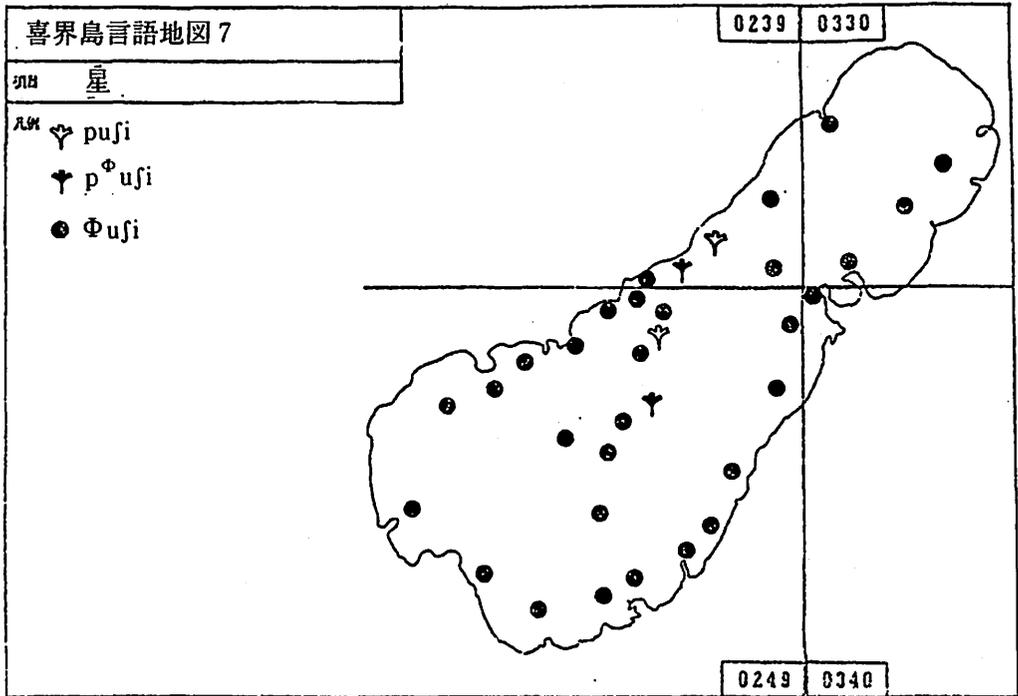
奈良時代の日本語では、ハへ乙であるから、*papeを推定することができる。列島中央語と同様に、琉球列島においてもハ行転呼音が起こっているから、paΦi→pai→pe:のように第2音節が第1音節と融合し、その語頭音が破裂音のPからΦ音になり、さらにh音に変化していったと推定される。

そこで、現在の各集落の語形をあげれば次のようである。

pe: 阿伝、嘉鈍、白山、早町、小野津、伊砂、坂嶺、中熊、西目

p^Φe: 志戸桶

Φe: 浦原、蒲生、塩道、佐手久、伊実久、長嶺、滝川、城久、先内



he: 荒木、手久津久、上嘉鉄、先山、川嶺、花良治、島中、山田、羽里、池治、赤連、中里

蠅を表す語において、P音をもつ方言は、東海岸の阿伝から北の地域に、西海岸の中間や大朝戸から北の地域に分布している。

Φ音をもつ地域は、さらに広がって、東海岸は先山から北の地域に、西海岸は中間から北の地域に、そして島の内側では城久から北の地域に分布している。つまり、Φ音はP音の近隣に分布しているということである。

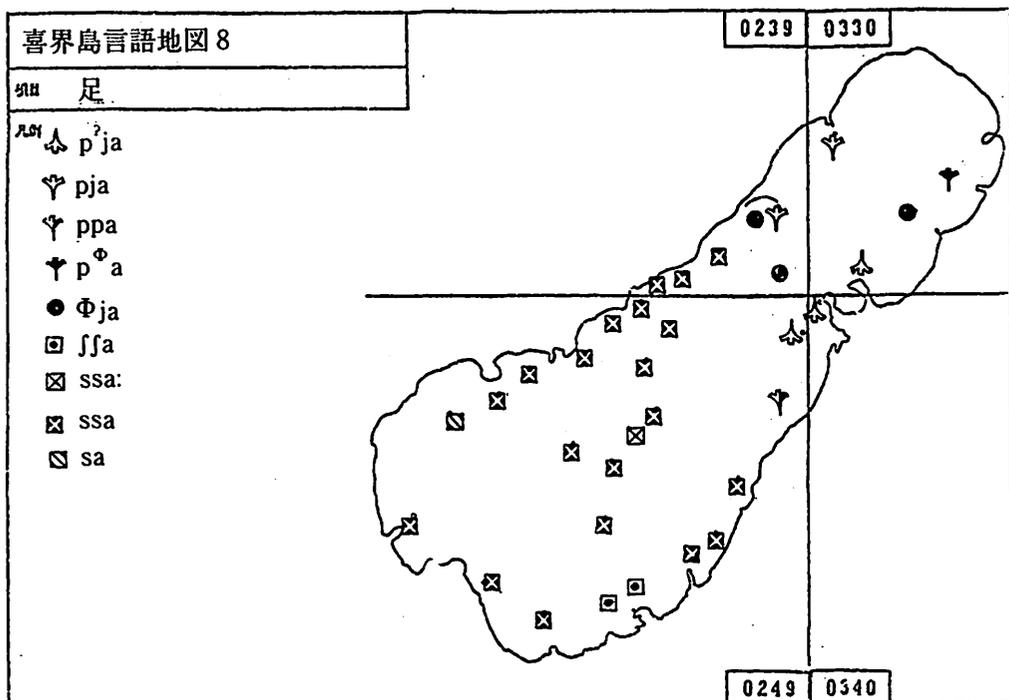
h音は、湾を中心に南部一帯にまとまって分布している。

蠅の方言分布の姿は、花の場合と類似している。広母音aの前に位置するという共通の環境によるものである。蠅の方言において、a母音と融合してae→e:の変化を起こしても、それはP音に大きな影響を及ぼすものではないといえよう。

肘の方言分布

奈良時代の肘を表す語は、ヒ₁₁ヂであるから、*pidiを推定することができる。肘の語頭音について、その方言形を分類すると次のようになる。

pidgi 白山、早町、坂嶺、中熊、西目



p^Φidzi 志戸桶、中間

Φidzi 花良治、蒲生、塩道、佐手久、小野津、伊実久、長嶺、城久、先内

cidzi 荒木、手久津久、上嘉鉄、先山、浦原、川嶺、阿伝、嘉鈍、伊砂、大朝戸、島中、山田、羽里、池治、赤連、湾、中里

P音の分布をみると、東海岸は白水から北の地域に、西海岸は中間から北の地域に分布しているが、蠅の方言形と比べて、P音が減退しているのがわかる。

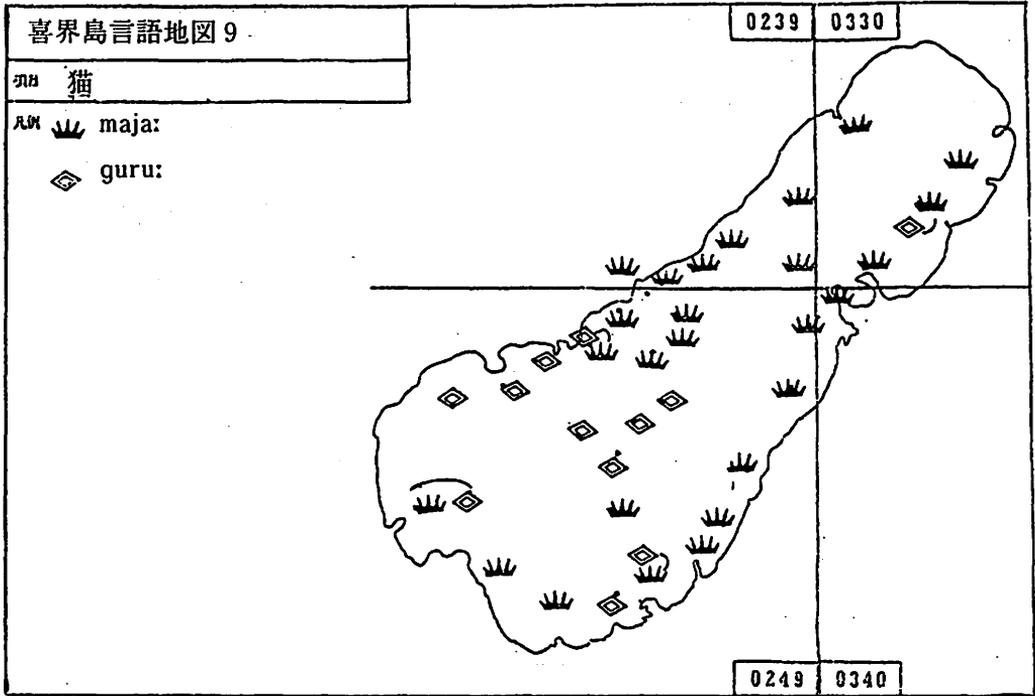
Φ音は蒲生から北の地域に、西海岸は中間から北の地域に、島内は城久から北の地域に分布している。

ç音は、湾を中心に南部一帯に分布しているが、北の地域にその勢力を伸ばしつつあることが知られる。

全体的にみて、肘におけるP音は、蠅におけるより、その分布の地域を狭ばめていることが明らかとなった。

船の方言分布

船を表す語は、奈良時代にもフネであり、交替形としてフナがあった。*puneを推定することができる。第2音節のネは、喜界島の方言では中舌母音で表われるものがある、なかなか複雑である。語頭のハ行音に着目して各方言形を分類すれば次の



ようである。

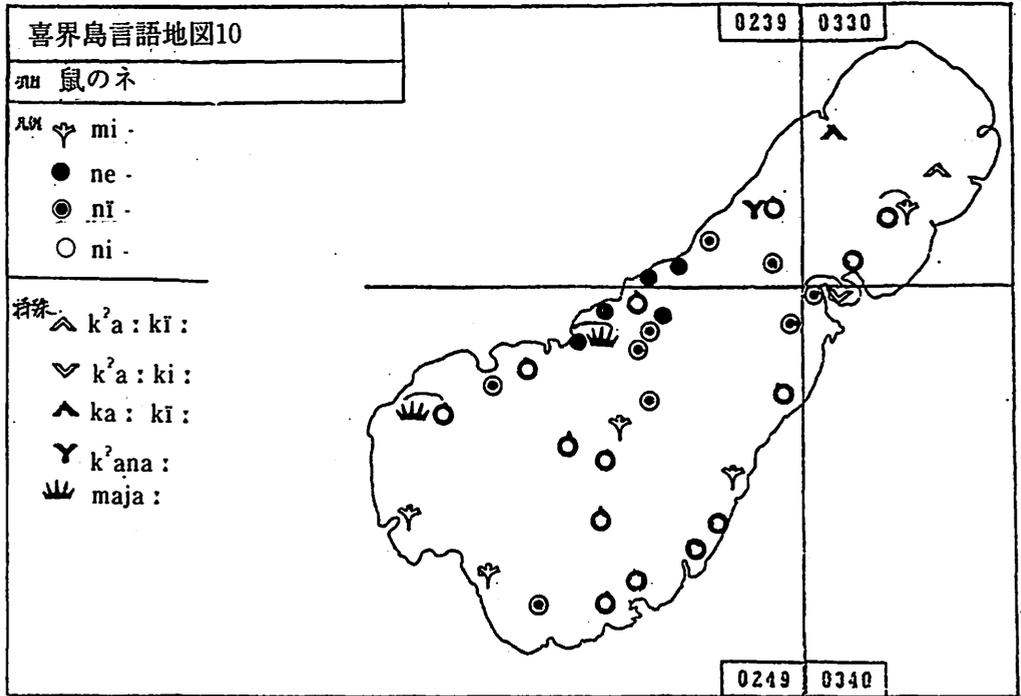
- punī 大朝戸
- puni 伊砂、中間
- p^Φunī 坂嶺
- Φune 川嶺、西目
- Φunī 荒木、浦原、花良治、蒲生、阿伝、白水、早町、塩道、佐手久、志戸桶、小野津、伊実久、長嶺、中熊、島中、滝川、羽里、赤連
- Φuni 手久津久、上嘉鉄、先山、嘉鈍、城久、山田、先内、池治、湾、中里

P音の分布をみると、東海岸で消滅して、西海岸の中間、大朝戸、坂嶺、伊砂で現れているにすぎない。その分布領域は肘におけるよりもさらに減少していることがわかる。

Φ音はu母音の唇音性のために化石的に存在しているとみられ、P音はすべてΦ音に流れ込んでいる。u母音の前ではh音への移行は音声的に困難である。

辯の方言分布

奈良時代の辯を表す語は、へ甲ラであるから、祖形として*peraを推定することが



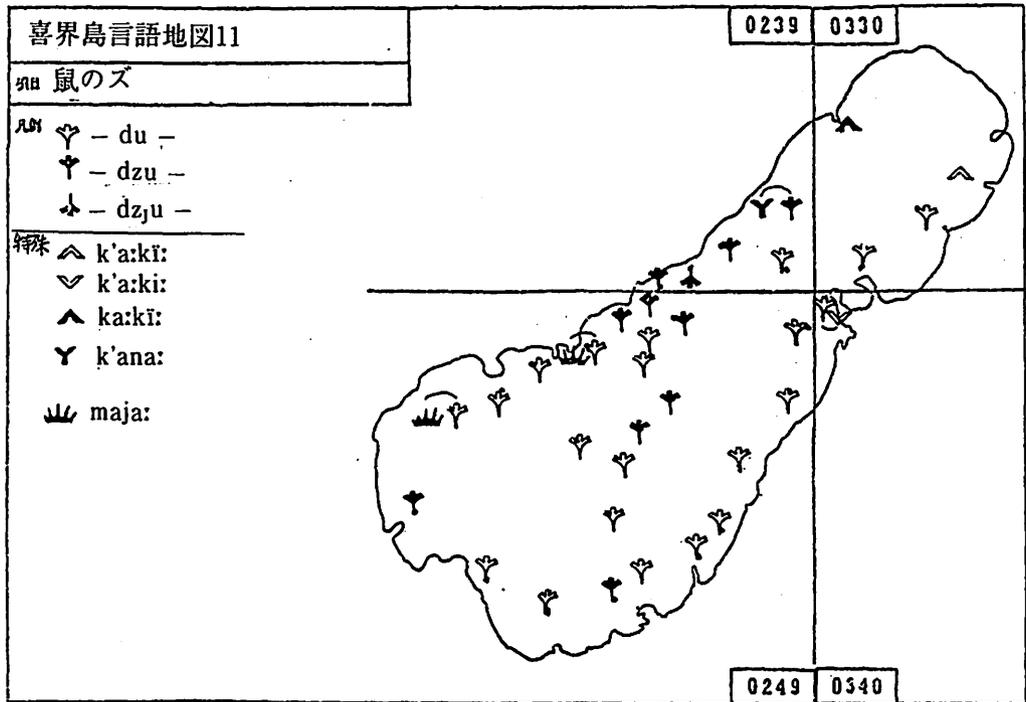
できる。各方言形を分類して示せば次のようである。

- pira 阿伝、嘉鈍、小野津、坂嶺、大朝戸
 p^φira 白水、早町、志戸桶、滝川
 Φira 花良治、蒲生、塩道、西目、島中、城久、羽里、先内、中間
 Φera 長嶺、中熊
 çira 手久津久、先山、浦原、川嶺、山田、池治、赤連、湾、中里
 hera 伊砂
 ti:bira 上嘉鉄
 N. R. 荒木、佐手久、伊実久

鏝における P 音は、阿伝や大朝戸から北の地域に分布していて、ほぼ中部に広がっている。

Φ音は東海岸が花良治から北の地域に、西海岸は中間から北の地域に分布している。島の内側では羽里、城久から北の地域に現れていて、分布領域が広い。

ç音は、南部一帯に分布している。上嘉鉄の ti:bira は、「手鏝」のことである。全体的にみて、鏝におけるハ行音の分布は、蠅の方言分布と類似している。



星の方言分布

星は古くからホシであり、祖形**poſi*にさかのぼる。喜界島の方言形は次のように分類される。

puſi 伊砂、大朝戸

p^ɸuſi 坂嶺、滝川

ɸuſi 荒木、手久津久、上嘉鉄、先山、浦原、川嶺、花良治、蒲生、阿伝、嘉鈍、白水、早町、塩道、佐手久、志戸桶、小野津、伊実久、長嶺、中熊、西目、島中、城久、山田、羽里、先内、中間、池治、赤連、湾、中里

琉球列島では、*o*→*u*の音韻変化があり、喜界島方言もこの影響を受けている。したがって、*poſi*は*puſi*に変化した。

P音をもつ方言は、西海岸の中部、伊砂、大朝戸、坂嶺、滝川に限られる。「花」などに比べてP音の領域が狭い。他はすべての地域でɸである。u母音の影響で、ɸから*h*や*ç*に変化することがない。

足の方言分布

琉球列島の方言で足を表す語にヒサ系とハギ系がある。喜界島はヒサ系の地域であ

る。ヒサは祖形 *pisa にさかのぼる。

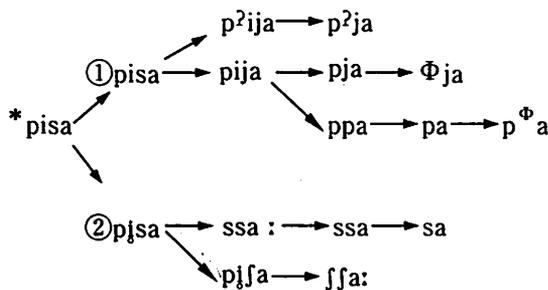
喜界島の足を表す方言形は次のように分類される。

- p²ja 白水、早町、塩道
- pja 小野津、伊実久
- ppa 嘉鈍
- p^Φa 佐手久、志戸桶
- Φja 伊実久、長嶺
- ɸja 先山、浦原
- ssa: 城久
- ssa 荒木、手久津久、上嘉鉄、川嶺、花良治、蒲生、阿伝、伊砂、坂嶺、中熊、西目、大朝戸、島中、滝川、山田、羽里、先内、中間、池治、赤連、湾
- sa 中里

P音は、pisa→pjaのような変化をして東海岸の嘉鈍から北の地域に、西海岸の伊実久から北の地域に分布している。P音の近隣にΦjaのような形でΦをとどめている方言もある。

一方、中部地域から南部地域にかけてヒサがɸja, ssa, saなどに変化してP音をとどめていない。

これらの分布から喜界島のヒサ系は、変化していく過程で次のような分化が起こったことがわかる



こうして異なった変化の道筋を経た語形同士は、同じ方向に変化して互に交わることはまずないであろう。

これまでみてきたように、P音の残存のようすは語ごとに異なるけれど、ほぼ次のようにまとめることができる。

つまり、P音をよくとどめている「花」や「蠅」のグループと、P音が少ない「船」や「星」のグループと、その中間に位置する「肘」や「足」や「鋸」のグループに分かれるということである。

このことから、広母音aの前に位置するP音は保存されやすく、後舌の狭母音uの前に位置するP音は失なわれやすいという傾向がよみとられそうである。

猫の名称の変遷

猫を表す喜界島の方言は、マヤーとグルーの両形であり、次のようになっている。

- maja: 荒木、手久津久、浦原、川嶺、花良治、蒲生、阿伝、嘉鈍、白水、早町、塩道、佐手久、志戸桶、小野津、伊実久、伊砂、長嶺、坂嶺、中熊、西目、大朝戸、島中、先内、中間、池治
- guru: 荒木、上嘉鉄、先山、浦原、佐手久、滝川、城久、山田、羽里、池治、赤連、湾、中里

マヤー系は、北部と中部を中心に分布し、グルー系は湾を中心に南部に分布している。

拙著『図説琉球語辞典』の言語地図をみると、マヤー系は琉球列島で一般的にみられ、mjau, maju, ma: u, mai, maja: などの諸形が列島全域に広がっている。グルー系は、奄美大島の恩勝に存在している。そのほか、わずかであるが久米島鳥島にトゥカーがあり、宮古多良間島にニカがある。

喜界島で猫をマヤーとかグルーというが、その名付けかたが興味深い。マヤーは猫の鳴き声からきた擬声語である。ではグルーはどのような語であろうか。これも擬声語で、猫が人なつこくすり寄って来て喉を鳴らすところからきている。同じ擬声語由来の語であっても鳴き声と喉を鳴らすことの両方から来ているのは興味深いことである。

沖縄方言で猫をマヤーというのだが、猫を呼ぶときは独特のしぐさがある。手をさし出し、手の平を上にして指を立て、屈伸させる。手はちょうど欧米人が手まねきを

するような動きをする。手の動きに合わせて、クルクルと呼ぶのである。そして猫の喉をなでてやると猫は喉をクルクルと鳴らして安心する。この呼び声のクルが喜界島で猫の名称に発達したと考えられる。

これらのことをふまえて、喜界島の猫の名称の歴史をみると、はじめは他の島々と同様にマヤー系が全域に広がっていたのだが、そこへ猫の呼び声であるクルから猫の名称のグルーができた。これが文化的な中心部である湾集落から起こり、その周辺の南部に広がりつつあるとみることができる。グルーが喜界島独自の語形として発生したとも考えられるが、同様の名称が奄美大島の恩勝にも存在することを考えると奄美大島の文化的な中心部である名瀬あたりで発生し、これが喜界島の湾に侵入してきたと考えることもできる。喜界島から恩勝に影響したとは考えられないから、名瀬から恩勝にも喜界島にも広がっていったとみるのが適当であろう。

鼠の名称の変遷

鼠を表す喜界島の方言は複雑であるが、これをいくつかの系統に整理して分類すると次のようである。

カーキー系

- k²a : kī : 志戸桶
- ka : kī : 小野津
- k²a : ki : 早町
- k²ana : 伊実久

ネズミ系

- midumi 阿伝
- miduma : 手久津久
- midungga : 荒木
- nīdumi 早町、長嶺
- nīdumī 白水
- nīduma : 上嘉鉄、大朝戸、島中
- nīdumi 浦原、塩道、佐手久、羽里、池治、湾、中里
- nīdumja : 浦原

niduma : 川嶺、嘉鈍、山田

nidzumi 伊砂

nidzumi 先山、先内

nidzumja : 伊実久

nidzuma : 赤連

nedzumi : 西目、中間

nedzuma : 坂道

nedzuma : 中熊

マヤー系

maja : 中間、中里

琉球列島の鼠を表す語を『図説琉球語辞典』からひろくと、ユムヌ、ウエンチュ、ウヤザ、ネズミ、カーキーなどである。ユムヌ系は宮古島と沖永良部島に分布し、ウエンチュ系は沖縄、八重山に分布している。ネズミ系は奄美地域だけに分布している。琉球列島全域の歴史を考えると、ユムヌ系が最古層で、その上にウエンチュ系が広がり、次に奄美地域だけにネズミ系が広がったといえる。ネズミ系は琉球列島ではもっとも新しい語であるとみてよい。

喜界島ではネズミ系が圧倒的に多く分布し、カーキー系がわずかながら北の地域に分布している。カーキー系が喜界島だけに分布しているところをみると、喜界島が発生した特殊語形とみられる。おそらくネズミ系より古い層であろう。

不思議なことに鼠をマヤーという地域が二・三みられる。マヤーはすでにみたように猫を表す語であるのに、これが鼠を表すわけである。なぜ、このような現象が起こっているであろうか。それには次の二点がかかわっていると思われる。

(1)猫をマヤーを称していたところへ新しくグルーという語が用いられるようになった。そのためにマヤーが鼠を表す語として用いられる状況をつくりだした。中里と池治でネズミ系と併用されるのはそのためである。

(2)鼠と猫とは意味的に全く別のものであるが、鼠が畑のさとうきびを食い荒らすということと、猫が食物を食い散らかすこととが、害を及ぼす点に着目すると、共通のものと認識されるので、この点が橋渡しとなって意味がずれていったと考えられる。

なお、喜界島のネズミ系の音声変化にも特色がある。

第一音節の鼠のネの頭子音の部分が、mであるのと、nであるのに大きく分かれる。mをもつ語は東海岸寄りに分布しているようであり、ne, ni, ni は西海岸からしだいに

島の内側に広がっていっているように分布している。ネズミを受け入れる際に、語頭を mi としているのは特殊な現象である。

第二音節の鼠のズの部分で du と dzu に分かれる。du はほぼ全域に分布しているのに対し、dzu は西海岸寄りに分布している。鼠の奈良時代の語形はネズミ_甲であるから第二音節の子音ははじめから摩擦音である。したがって、ズが du となっているのは、o→u の母音変化と連動して狭母音の u の前の子音が緊張して du になったものと判断される。一方、国語史上の説として摩擦音をさかのぼると破裂音であったとする考えかたもあるから、この破裂音をもう一步さかのぼって破裂音であったとみることも不可能ではないのであり、この点はさらに検討を要する問題である。

参考文献

国立国語研究所『日本言語地図』大蔵省出版局、1974年完

中本正智『図説琉球語辞典』力富書房、1981年

- 『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局、1976年
- 「古代ハ行 P 音残存の要因」『国語学』107、1976年
- 「タ行音の構造的推移」『人文学報』117、1977年

九学会連合『奄美』日本学術振興会、1959年

この調査にご協力いただいた話者は次の方々である。心から感謝を申し上げたい。

(敬称略)

集 落 名	話 者 名 (性別)	生 年	年 齢
荒 木	光 岡 繁 雄 (男)	T・11	(64歳)
手久津久	森 元 実 (男)	M・38	(81歳)
上 嘉 鉄	西 山 順 吉 (男)	M・42	(78歳)
先 山	嘉 重 三 (男)	T・9	(66歳)
浦 原	坂 上 豊 三 (男)	T・6	(68歳)
川 嶺	伊 地 知 司 (男)	S・3	(57歳)
花 良 治	春 田 マ ツ (女)	M・36	(83歳)
蒲 生	澄 田 幸 (女)	T・14	(61歳)
◦	澄 田 貞 三 (男)	T・6	(69歳)
阿 伝	津 田 ツ ル (女)	M・45	(74歳)

嘉 鈍	岡 村 次 夫 (男)	S・3	(57歳)
白 水	初 瀬 一 美 (男)	T・6	(69歳)
早 町	田 畑 玄 菴 (男)	M・30	(89歳)
塩 道	加 納 昭 一 郎 (男)	T・8	(67歳)
佐 手 久	坂 元 明 (男)	M・43	(75歳)
志 戸 桶	吉 山 ま つ (女)	T・11	(64歳)
小 野 津	台 司 三 代 二 (男)	T・7	(67歳)
伊 実 久	久 永 豊 満 (男)	M・31	(89歳)
伊 砂	玉 岡 克 己 (男)	S・7	(53歳)
長 嶺	下 島 禎 伯 (男)	M・43	(75歳)
坂 嶺	英 啓 太 郎 (男)	S・6	(55歳)
中 熊	岡 す ま (女)	M・40	(79歳)
〃	加 納 栄 (男)	T・13	(62歳)
西 目	村 山 本 哉 (男)	M・37	(82歳)
大 朝 戸	福 山 重 太 郎 (男)	T・7	(67歳)
島 中	安 村 忠 光 (男)	T・3	(72歳)
滝 川	嶺 岡 頼 雄 (男)	T・13	(62歳)
城 久	平 保 (男)	M・43	(75歳)
山 田	山 崎 政 元 (男)	T・10	(64歳)
羽 里	政 実 吉 (男)	M・42	(76歳)
先 内	永 政 敏 (男)	M・37	(83歳)
中 間	豊 園 幸 郎 (男)	S・5	(54歳)
〃	竹之内 芳 雄 (男)	T・6	(69歳)
〃	勝 田 健 男 (男)	T・6	(69歳)
池 治	榑 養 助 (男)	T・3	(72歳)
赤 連	巖 勝 二 (男)	T・4	(70歳)
湾	基 井 シ ギ (女)	M・43	(76歳)
中 里	恵 畑 直 (男)	T・6	(69歳)

(表中、M=明治、T=大正、S=昭和)

実験講座によって方言研究のプロジェクトが組織され、本研究は、その成果の一つであることを付記する。